

## 〈地域を元気にする秘訣 — 地域をかえよう〉

弘中 岡村さんが酒蔵の建物をこういうオープンな空間に生まれ変わらせようと思われたきっかけは何だったんですか？

岡村 僕は東京の大学を卒業して、大阪の酒造メーカーに就職しました。上の二人の兄がどちらも家業を継がなかったので、父親が体調を崩したのをきっかけに帰郷することになったんですが、戻って一番に感じたのは、田舎やなあ…と。でもそれが嫌だったわけじゃないで、この古い建物を何とか商売に活かせないかと考えたんです。それで最初、蔵人さんも一緒に、空いていたこの2階の床を張り替えて、掃除してというところから始めました。酒造りの本番は冬ですから夏場は結構、暇なんです。3カ月かけて作業を終えた時点で、蔵人さんから「来年は何するん？」と聞かれたのが弾みになって、次の年は奥の大広間、その次は空き家になっていた建物を食事処（※田舎酒蔵料理「遊亀亭」）にと改修作業を続けていったんですが、古民家の雰囲気

をお客様が喜ばれるんです。それが嬉しくてずっと続けるうちに、対象が町並みにまで広がって、「とよさとまちづくり委員会」というNPOの立ち上げにつながりました。

弘中 古い建物を商売に活かすという感覚は、本業の酒造りにも反映されるものですか？

岡村 うちの酒造りは昔からのやり方ですね。酒造りのシーズンになると能登半島から杜氏さんに来てもらって、今後どうするか真剣に考えなくてはならない時期が来ました。機械化する方法もありましたが、僕は豊郷の町並みに併せて、これまでどおりの酒造りがしたかった。それで8年前に地元で蔵人さんを採用して、杜氏さんの技術を引き継いだんです。それと一緒に、それまでは県外産の米を使ってきたんですが、本当に地酒と呼ばれるものを作ろうと、原料も100%近江米に切り替えました。当時、この吉田の集落では農業の後継者不足から営農組合が組織化されようとしていたんですが、うちは良い酒を造るために近江米を使う、

菅農さんは良い米を作れば売れるという回路が、5年ほど前から定着していますね。

弘中 地元の農業と連携した理想的な形があるということですね。農業だけにとどまらず、町づくりにまで関わっていくかと思うのはどうしてですか？

岡村 どこまでを町づくりと言うのかはわかりませんが、古い町並みと古い酒蔵、それが一つのイメージとしてお客様の印象に残ると思うんです。うちは小さな酒蔵ですから、広告費もそうはかけられません。お客様に覚えていただくためには、そのイメージがとて有効な手段なんです。まちづくり委員会の活動を通じて、学生さんとの関わりもできて、僕たちが地元の空き家を借り上げ、竹岡さんたち学生にゆだねるといふ、なかなかうまくいってきかたと思うのですが。実際にお客様の数も、年間3万人までに増えてきていますしね。

弘中 地元の人間同士のつながりと、学生さんとの新しいつながりが、うまくかみ合っているんですね。高田さんは、地球の芽という事業会社を通じて、

## それぞれの「きっかけ」

## ●対談

岡村 博之 (左上)

株式会社 岡村本家

高田 友美 (右上)

株式会社 地球の芽

竹岡 寛文 (右下)

滋賀県立大学 大学院 環境科学研究科  
とよさと快蔵プロジェクトメンバー

## 〈リーディング テーマ2—地域をかえよう〉

leading theme 2 — I will change ab area

## 企業と町づくり

いろいろな形の、利益の「環」を…

それぞれの手法で「町づくり」に関わる二つの企業と学生プロジェクトの皆さんに対談していただきました。企業と町づくり、学生と町づくりの接点になるものは何なのか？そこには「社会的企業」という言葉の概念を超えた、さまざまな利益のカタチがあるようです。

- 進行／滋賀大学経済学部 企業経営学科 准教授 弘中 史子
- 豊郷町吉田 岡村本家(2Fギャラリー)
- 2007年4月27日



酒蔵の2階を改装したギャラリー。利用するには事前予約を  
テーブルは酒樽のフタ、いい色合い



町づくりにどのように関わっていきたいとお考えですか？

**高田** 会社の方針を代弁しますと、地球の芽の親会社である秋村組は60年代に土木の会社として設立され、道路を造ったり水道をひいたりという仕事から徐々に事業を展開し、ここ10年くらいで住宅や公共建築を手がけるようになりました。でも、それはまだ部分としての仕事で、もっと全体を包括するような事業に取り組むことで、今以上に良い環境を創造できるのではないかと、そこから何か新しい社会が見えてくるかもしれないという思いがあつて、第一弾として小舟木エコ村プロジェクトがスタートしました。私自身、エコ村は未来が感じられるような場所であつてほしいと思うのですが、近江八幡の風土やポテンシャル(潜在能力)をうまく取り入れることで、エコ村の波及効果として近江八幡が変わる、滋賀県が変わる、日本が変わるという思いを込めて、プロジェクトに取り組むつもりです。

**弘中** エコ村とはどういう場所なのか、具体的に説明していただけますか？

**高田** それはお客様からも最初に受け

る質問なのですが、ひと言では表現しにくくて、どう説明すれば一番伝わるのか、最近、社内でも議論しているところなんです。その中でふと気づいたのは、逆にエコ村にどのようなイメージを持たれますかと聞いたとき、その人の環境問題なり社会問題に対する意識が引き出されるということです。例えば若い夫婦なら安心して子育てができるとか、学生さんならどんな面白いことがここでできるとか、エコ村に期待されることはとても幅広いんです。それだけにエコ村づくりは難しくもありますが、いろいろな人を魅了できるキーワードであると思います。

**弘中** 期待されることそのものが、今後のエコ村のコンセプトになり得るということでしょうか。

**高田** そうですね。

**弘中** 竹岡さんは京都のご出身ですが、滋賀県の大学に進学して、そこでなぜ町づくりにまで携わろうと思われたのですか？

**竹岡** 大学進学をきっかけに彦根で下宿して、4年間の大学生活で京都とはまた違った魅力を感じるようになりました。

した。京都は都としての歴史や文化が背景にあります。滋賀は自然や人々の暮らしを背景とする深い意味での歴史を有しています。大学の授業で、中山道の宿場町だった地域と関わり、その時に今まで積み重なった地域の歴史をこれからの町づくりにどう繋げていくかという課題が出されました。それを考える中で、その土地が持っている魅力を活かすためにできることは沢山あるんじゃないかと町づくりの可能性を感じました。それを探るためには4年では時間が足りなくて、大学院に進んだのです。

**弘中** 具体的にどういった活動を通じて、その土地の歴史や魅力を感じましたか？

**竹岡** とよさと快蔵プロジェクトは建築を専攻している学生が主体なのですが、岡村さんの酒蔵も含めて古民家では昔の職人の技を目の当たりにできます。それこそ持続可能な地域のあった時代から、現在に至っているわけで、持続可能という言葉が意味するのはこういうことかと、現代に通じる何かを感じます。作業中に目にした百年分近く